

## 中垣正史:講演資料

### お雇い外国人概説とホーレス・ケプロン

平成 23 年度札幌シティガイド フォローアップ研修講座

第 1 回講座 平成 23 年 11 月 30 日(水) 14:00-16:00 実施

「開拓使時代とアメリカ人」(講演要旨)

(担当講師) 北海道・マサチューセッツ協会 理事・事務局長 中垣 正史

#### 1. お雇い外国人概説

##### ■ お雇い外国人概説

ペリー来航(1853~54)のよってもたらされた開港を契機として、明治政府・府県や民間においても、急速な近代化を迫られます。そのために、先進諸外国より多くの指導者・技術者を招聘し、「お雇い外国人」として雇用することとなります。

全国的な外国人雇用は、日本の政治・法制・経済・産業・教育・芸術の広範な分野にわたり、その職務も、雇用機関の顧問から、教師・技師・職工・水夫・火夫・農牧夫・雑務のいたるまで、実に多彩です。この全国的なお雇い外国人の実態を把握するのは、資料的に難しいのですが、ユネスコ東アジア文化研究センター「資料御雇外国人」には、1868 年(明元)~1889 年(明 22)の間の官・公・私雇合計 2,299 人 という記録があります。

国籍別人数は次の通りです。

|       |       |         |      |        |      |
|-------|-------|---------|------|--------|------|
| イギリス人 | 928 人 | オランダ人   | 87 人 | スエーデン人 | 9 人  |
| アメリカ人 | 374 人 | オーストリア人 | 21 人 | ポルトガル人 | 6 人  |
| フランス人 | 259 人 | デンマーク人  | 21 人 | その他    | 24 人 |
| 中国人   | 253 人 | イタリア人   | 18 人 | 不明     | 80 人 |
| ドイツ人  | 175 人 | ロシア人    | 16 人 | 多国籍    | 28 人 |

さて、北海道の開拓使「お雇い外国人」は、1871 年(明 4)~1881 年(明 14)の 10 年余の短期間に、78 人を雇用しています。これは、ロシアの南下政策に危機感を抱いた明治政府が、北海道開拓を急務としたことによります。開拓使雇用 78 人の職務・国籍別人数は次の通りです。

#### 開 拓 使 の お 雇 い 外 国 人

|       | アメリカ | 中 国 | ロ シ ア | イギリス | ド イ ツ | オランダ | フランス | 計  |
|-------|------|-----|-------|------|-------|------|------|----|
| 開拓顧問  | 1    |     |       |      |       |      |      | 1  |
| 学校教師  | 11   |     | 1     | 2    |       | 2    | 1    | 17 |
| 汽船乗組員 | 9    |     |       |      | 3     |      |      | 12 |
| 鉄道建設  | 8    |     |       |      |       |      |      | 8  |
| 農業・牧畜 | 5    |     |       |      |       |      |      | 5  |
| 測量・土木 | 3    |     |       |      |       | 1    |      | 4  |
| 建 築   |      |     | 4     |      |       |      |      | 4  |
| 地質・鉱物 | 3    |     |       |      |       |      |      | 3  |
| 採 鉱   | 2    |     |       | 1    |       |      |      | 3  |
| 革 鞣   | 1    | 2   |       |      |       |      |      | 3  |
| 機械・工作 | 2    |     |       |      |       |      |      | 2  |
| 罐詰製造  | 2    |     |       |      |       |      |      | 2  |
| 裁 縫   |      |     |       |      | 1     |      |      | 1  |
| 医 師   | 1    |     |       |      |       |      |      | 1  |
| 外国船取締 |      |     |       | 1    |       |      |      | 1  |
| 通 訳   |      | 1   |       |      |       |      |      | 1  |
| 農 夫   |      | 10  |       |      |       |      |      | 10 |
| 計     | 48   | 13  | 5     | 4    | 4     | 3    | 1    | 78 |

(註) 職種は当初契約によった。

この、開拓使雇用「お雇い外国人」の経緯は、次に詳述します。

■ 明治政府の開拓使設置—外国人指導者の招聘

明治2年(1869)7月、明治政府の開拓使設置—同年8月蝦夷地を北海道と改称します。

黒田清隆が、明治3年(1870)5月開拓次官となり、明治7年(1874)8月には、第三代開拓使長官となり開拓使廃止直前<最後の開拓長官西郷従道は、明15,1,11-15,2,8の短期在任>の明治15年(1882)1月まで、本道行政の直接の責任者として活躍。黒田は、北海道の開拓の基礎を築いた最大の功労者といわれます。

明治4年(1871年)1月、開拓次官黒田清隆(30歳)は、留学生7名とともに渡米<2月12日~6月7日>、森有礼(30歳・駐米公使)とともにグラント大統領(49歳)に開拓使顧問の招聘を依頼、米国農務省長官ホーレス・ケブロン(1804-1885、当時67歳)の顧問契約を成立させます。

(この間、英・仏・蘭を経て露に至り、帰路米国で機械等を購入)。合計78人の外国人指導者(そのうちアメリカ人48人)を招いて北海道開拓に欧米の先進技術を導入したのも黒田の高い識見によるものでした。

ホーレス・ケブロン<1871年(明治4)8月25日来日~1875年(明治8)5月23日離日>は、明治4年(1871年)8月、秘書エルドリッジ、科学技術師アンチセル、土木技師ワーフィールドを伴って、最初の開拓使お雇い外国人として来日します。(約3年9カ月日本滞在)

最初に、アンチセル、ワーフィールドの開拓予備調査。そしてケブロン自身の3回にわたる道内各地の長期視察・調査を通してまとめられた「ケブロン報告書」(明治4年(1871)11月、明治6年(1873)11月、明治8年(1875)3月)、さらに離日に際して、開拓使に提出した「報文要略」は、その後の北海道開拓の重要な指針となります。

■ ケブロン山脈…マサチューセッツ人脈(アメリカ人指導者48人)

ケブロン<年俸10,000ドル>は来日に際し、工学・地質・鉱学関係担当の技師として合衆国農務省に勤務していたアンチセル<年俸4,000ドル>、測量・土木関係担当の技師としてバルチモア・オハイオ鉄道に勤務していたワーフィールド<年俸4,000ドル>、それに書記兼医師としてジョウジタウン医科大学解剖学助手・合衆国農務省図書館司書をしていたエルドリッジ<年俸4,000ドル>という優秀なスタッフを同行しました。

参考：日本政府高官の給与 最高額・太政大臣の年俸 9,600円(ドル)

左大臣・右大臣 7,200円(ドル)

参議・各省卿大臣相当) 6,000円(ドル)

\* 黒田清隆の年俸は4,800円(ドル)

ケブロン在任中のお雇い外国人の大半は、ケブロンの推薦・承認のもとに採用されたこともあり、多くのアメリカ人技術者が中心となったようです。

地質・測量・鉱山開発のベンジャミン・S・ライマン<年俸7,000ドル>(1835-1920)<1873・明6,1,18来日~1880・明13,12,22離日・滞在6年半> 助手マンロー<年俸4,000ドル>(1872・明5来日~後、コロンビア大学学部長)、農業・牧畜のボーマー(1871・明4来日~) オハイオ州の牧畜酪農家エドウィン・ダン(1848-1931)<1873・明6,7来日・25歳~明9,6来札~明15,12離札~1931・昭6,5,15東京自宅死去> などがよく知られています。明治9年(1876)6月、エドウィン・ダンは、園芸担当のボーマーと共に札幌官園に転勤し、直ちに真駒内牧牛場の建設に着手、搾乳場・乳製品加工場・用水路など、牧場の施設が整備していきます。

ケブロン帰国後も、札幌農学校関係では、

初代教頭・農学・化学・数学のウィリアム・S・クラーク<年俸7,200ドル>(1826-1886)<1876・明9,7,31来札・当時50歳~1877・明10,4,16離札・滞在8ヵ月16日>、

土木工学・数学・第2代教頭で、時計台・モデルバーン・豊平橋などを設計したウィリアム・ホイラー<年俸3,000ドル>(1851—1932)<1876・明9,7,31来札・当時25歳~1879・明12,12帰国・滞在3年半>、

化学・農学・数学・第3代教頭で、石炭・ローソク・マッチ・コークス・魚油などの製造実験をしたディヴィッド・ベンハロー<年俸2,500ドル>(1851-1932)<1876・明9,7,31来札・当時22歳~明13,8・滞在4年間>

農学・官園監督・第4代教頭で、丘珠タマネギ・トウモロコシ・カボチャ・トマト・キャベツなどを栽培したウィリアム・ブルックス<年俸2,500ドル>(1851-1938)<1877・明10,2来日・当時26歳~明21・滞在10年7ヶ月>

生理学・解剖学・病院医術顧問で札幌の病院施設の充実・学校の身体検査の創始などに努めたジョン・C・カッター(1851-1909)<1878・明11,9来日~1887・明20,1・滞在8年4ヶ月。一死後1910年、遺言により札幌市に寄付された500ドルをもとに1938年・昭13に大通西5「聖恩碑」四隅にカッターさんの水飲み場が設置されている>



## 2. ホーレス・ケブロン(1804-1885)と黒田清隆(1849-1900)

### ■まえがき

1869年(明治2年)7月、明治政府の開拓使設置により、北海道の本格的な開拓がスタートしますが、1870年(明治3年)5月、開拓次官となった黒田清隆(1840-1900)は、北海道の開拓や農業経営の模範を米国に求めて、1871年(明治4年)4月、マサチューセッツ州出身の米国農務省長官(農務局長)ホーレス・ケブロン(1804-1885)(当時67歳)を開拓使顧問として招聘しました。

ケブロンは、滞日3年10ヵ月、その間3回にわたり、道内各地の視察・調査に來道し、北海道の基本的な開発計画を提案し、札幌を首都とすること、農業開発のために高等教育機関を設置することなどを内容とする詳細な「ケブロン報文」を作成しています。

このケブロンの進言により、米国の進んだ畜産技術や農耕馬によるプラオの使用を普及させたエドウィン・ダン(1848-1931)を招き、またマサチューセッツ農科大学長ウィリアム・S・クラーク(1826-1886)を迎えて札幌農学校を開校(明9.8.14)させます。ケブロンの提言は、すべて、北海道開拓の基礎事業、開発すべき諸産業の振興に関するものであり、その後の北海道の開拓・開発の重要な指針となるものであったといわれています。

### ■明治政府の北海道開拓

明治政府は、ロシアの南下政策に対して、北方の防備のために北海道の開拓を急務としていました。

黒田(29歳)は、1870年(明治3年)樺太専任開拓次官となり、7月から樺太出張してロシア関係の調整にあたるも危機感を強くします。北海道を視察して帰京すると、10月20日、北海道開拓の必要性を説く建議書を提出して、すぐにも外国から開拓のことに長ずるものを雇い、北海道への移民・工業・鉱山測量などのことを実施すべきであると主張しました。

明治政府は11月、この黒田の提案を全面的に受け入れて、北海道開拓に必要とする、開拓に長じた外国人技術者の雇用と農業機械購入など、樺太・北海道全域の全てを黒田に委任します。その費用についても、開拓使の定額予算以外からの支出も保障しています。

黒田(30歳)は、北海道の開拓や農業経営の模範を米国に求めて、1871年(明治4年)1月4日、留学生7名を伴って米国に向けて出発、サンフランシスコから大陸横断鉄道でワシントンに到着します。黒田は、当初から北海道開拓に必要なお雇い外国人を主として米国に求める考えであったようです。また、直接の人選の衝にあった森有礼(1847-1889)は、気候風土の相似したニューイングランドの州を念頭にいていたようです。こうして、同年(明治4年)4月、黒田(30歳)は、駐米公使の森有礼とともにグラント大統領に会見して、日本政府の申し出を提示します。これを受けて米国は日本の要請を承認して、開拓使顧問としてホーレス・ケブロン(67歳)を推薦しています。滞米中の黒田は、密出国した野村高文という学生を通訳として採用したり、密出国の新島襄(後の同志社大学創立者)に学資を与えたりしています。また漂流して米国に流れ着いた漁船員なども援助して帰国させています。黒田はこの間、英・仏・蘭を経て、ロシアに至り、帰路米国で多くの資材・機械類を購入して、6月7日帰国します。帰国後、10月開拓使長官東久世通禧の辞任により、黒田は次官のまま開拓使の頂点にたつことになりました。

黒田は、その後1874—1881年(明治7年8月—明治15年)開拓使長官として、多くの外国人指導者を招聘して、北海道の開発や農工業の振興に力を注ぎ、今日の北海道および近代都市札幌の発展の基礎を築いたのです。北海道開拓の恩人といわれる所以です。

### ■開拓使顧問ホーレス・ケブロンの招聘

#### ケブロンの提示した条件をうけて日本政府が承認した契約の概要

～北海道こと「えぞ」は、日本の重要な領土であるが、内陸はまったく未開である。この「えぞ」の開発のために、その領土と島の農業その他の資源開発。地質・植物・鉱物の予備調査、道路・運河・町・駅の開発などの詳細な報告書を作成して提出すること。この任務のために、土木・建築・農業及び鉱業部門の主任助手を選任する。ホーレス・ケブロンの日本政府年俸は1万ドル(米国農務局長職は4,000ドル)、助手は3000～4000ドルとする。一行の日米往復と滞日中の生活の経費はすべて日本政府負担。さらに、家具つき住居提供、家賃・税免除。家事使用人・世話人・警備員を置く。～などの条件を提案しています。

明治政府は、ケブロンは1871年(明治4年)5月15日に任命しますが、後任の関係で大統領の最終承認が得られ

ず、結局ケブロンが6月27日に辞表を再提出して、グラント大統領の承認を得ています。ケブロンは来日に際し、工学・地質・鉱学関係担当の技師として合衆国農務省に勤務していたアンチセル、測量・土木関係担当の技師としてバルチモア・オハイオ鉄道に勤務していたワーフィールド、それに書記兼医師としてジョウジタウン医科大学解剖学助手・合衆国農務省図書館司書をしていたエルドリッジという優秀なスタッフを同行しています。

ケブロン他3名の一行は、1871年(明治4年)8月1日サンフランシスコを出発、8月25日午後6時半横浜港に到着しました。東京での宿舎は芝増上寺の本坊が「ケブロン館」に当てられました。早速、政府高官の饗宴をうけ、明治天皇にも謁見しています。

#### ■ホーレス・ケブロンの生立ち

父ドクター・セス・ケブロンは、医者、実業家。

1656年ころ、英国から移住。独立戦争(1775 - 1783)が起きると1781年春陸軍に入隊。ハドソン川で実践に参加、ニューヨーク司令部に配属。1790年除隊、マサチューセッツ州アトロボロ(ボストンの南方100キロ余)に戻り、再び医学の勉強をします。1790年9月、アトロボロの医師ベザリール・マンの娘ユニース・マンと結婚。

ホーレス・ケブロン(以下「ケブロン」)は、1804年8月31日、父セス・ケブロンの4男として生まれています。そして、父の移住(医師開業)により2歳—19歳までニューヨーク州ホワイツボロで過ごしています。

その間、父は綿織物工場・毛織物工場の経営にも成功しています。(ケブロン31歳の時、父は、1835年死去、74歳)3人の兄たちは、父の事業が成功していた時期で、それぞれ大学へ進学しましたが、「まるで台風のようにやってきた不況」のために、ケブロンは、大学進学断念を余儀なくされ、学歴は、旧制中学程度で、すぐに父の綿布製造業に従事して各分野の十分な知識を得て、すぐに事業に精通したといわれます。ケブロンは、1829年(25歳)メリーランド州バルチモアの綿布工場の監督となり、後にベルの工場の責任者としても成功し、綿布製造業界の著名人となっていきます。

1833~34年(30歳前後)、メリーランド州バルチモア—首都ワシントンをつ結ぶ鉄道建設現場で、労務者数千人の暴動が起こった時、ケブロンは知事の依頼によって、自警団の指揮としてこれを鎮めたのです。その功績により知事は、ケブロン(30歳)を取り立て、メリーランド州の国民兵32連隊少佐に任命されます。さらにまた数千人の鉄道の暴動を鎮圧したことにより、1834年3月、中佐に任命しています。

ケブロンは、1834年、地元資産家のニコラス・スノードンの娘と結婚し、妻の所有するローレルの広大な地所で綿織物工場を経営し、1849年(45歳)には、2500人を雇用しています。さらに、婦人が相続したスノードン家の土地を管理、地力の落ちた広大な荒廃地に資本を投入して、肥料を施して地力の回復に努め州第一の大規模農場に仕立て上げて科学的農業経営による作物栽培にも成功して、「農業の権威者」といわれます。1848年には、合衆国農業会副会長・メリーランド州農業協会会長となり、1850年(46歳)のロンドン国際博覧会には、メリーランド州代表として出席しています。

しかし、1年前の妻レイザの死とともに、1840年代末からの恐慌のあおりをうけて、事業も思わしくなく、失意のどん底に落ち込んでいましたが、知人の働きかけで、1852年(48歳)春、政府から北テキサス・インディアン居住地を治める特別任務の職を得て、各地で幾多の問題を適切に処理しています。

1854年(50歳)、ケブロンは2年の任期を終えて、再婚した妻マーガレットや子どもたちとともにイリノイ州に移住し、再び酪農経営に取り組みます。やがて家畜の飼育者としても成功し、家畜の品評会で度重なる入賞を果たし、全国の農業協会の役員として活動します。

1861年(57歳)の時、南北戦争(1861-1865)が起こり、ケブロンは3人の息子と北軍に入隊。1863年(59歳)に大佐に昇進、各騎兵旅団の指揮を命ぜられます。1866年(62歳)には准将(将軍)に昇任します。各地に参戦して64回の栄光に輝く戦闘に参加したといわれます。

しかしこの間、長男は戦死、次・三男は負傷しました。終戦後、イリノイ州に戻りますが、牧場は荒廃して再び経営することは困難な状態になりました。このような苦境にあったとき、たまたま初代農務省長官が亡くなります。

その後任者として、1867年(63歳)(慶応3年)、ケブロンが、合衆国農務省第2代長官(農務局長)の要職に「任命」されます。彼の健全な判断力、農場経営の豊かな知識、家畜・植物・土地に対する厳正な統計的認識、そのすぐれた部下統率能力などから、その職務はまったく適役といわれました。3年半在任して、1867~1870農務省年報の他、あらゆる農作物の実験栽培、土地管理、演芸・養蚕・酪農にまで及び、すぐれた仕事を残して、マスコミからも多く

の賛辞を受けます。

#### ■開拓使顧問ホーレス・ケブロン の来日

開拓使顧問として来日した、ホーレス・ケブロン(67 歳)の指導で、早速東京の青山・赤坂・麻布に官園(農業試験場)3ヶ所を設置、北海道に導入する作物の試作、家畜の飼育や農業技術者の養成などが行われます。(この事業責任者が村橋久成でした)

ケブロンは1871年(明治4年)8月25日来日、以後3年10ヶ月日本に滞在しますが、このホーレス・ケブロン一行の通訳の任に当たったのが、湯地定基(1843 - 1928)でした。湯地は、米国マサチューセッツ農科大学へ留学、クラーク博士の薫陶を受けて農政学を学んで帰国、開拓使出仕していました。ケブロンの3回に及び、長期北海道出張すべてに通訳として随行したといわれます。ケブロンによると、湯地は口数の少ない、きわめて謹直な人柄であったようです。ケブロン帰国後、湯地は、七重開墾場(七重勸業試験場長)の経営にあたり、洋式農業の普及に成果をあげ、後、根室県令(知事)、北海道庁理事官(副知事相当)に就任しています。1877年(明治10年)4月、クラーク博士が帰国を前に、かつての教え子「湯地定基」を激励するために、七重に立ち寄っています。

ケブロンは、まず、1871年(明治4年)8月~10月、アンチセルとワーフィールドを、開拓予備調査のため北海道巡検に派遣します。一行は、函館から恵山岬をまわって、噴火湾を横切り室蘭に渡り、海岸沿いに勇払川、千歳方面を通って札幌着。札幌附近が全道の首府たるべき地点であることを確認します。約2ヶ月間馬に乗って巡視し、豊平川架橋(当時は明治4年4月の仮橋)の急務、製造工場や水車の設置場所の選定、札幌室蘭間の道路計画なども含めた、北海道の気候・風土を総合的に考察した報告に基づいて、11月、「第1次報文」を開拓使に提出しています。

ケブロン自身の第1回目の道内巡検は、1872年(明治5年)5月、東京湾を出帆して、函館・室蘭を経て札幌に到着。札幌の「開拓使本庁舎」(~6年10月落成)の建築状況や製材場その他の諸工場の所在地(現在の大通り東1・2丁目附近全体の広い地域)を検分、さらに石狩・小樽を視察し、室蘭・函館を経て10月に帰京しています。

第2回目の道内巡検は、1873年(明治6年)6月出発、黒田の指示を受けて、東京の開拓使官園の試験成果を移植するために設置する、七重・札幌官園・試験場の調査、その輸送方法に関する現地調査、牧畜・耕種の適地調査、鉱山開採方法に関する調査などでした。函館・七重官園・室蘭を経由して札幌着。札幌の農作・工場を検分後、ライマンを伴って豊平川・石狩川の調査、石狩・当別視察、小樽・余市を経て岩内の茅沼炭鉱を検分、長万部・函館を経て9月に帰京しています。この第2回巡検後11月に、農業・牧畜、石狩各地炭田開発・輸送計画などを含む「第2次報文」を提出しています。

第3回目の道内巡検は、1874年(明治7年)5月出発。黒田の指示事項は、七重官園における果樹の点検と育成方法、室蘭に設置すべき木挽器械所の調査、新室蘭・札幌・小樽に予定している殖民(屯田)地の調査、札幌の種畜場・果樹・堤防の検分調査、ホロムイ・岩内石炭山の石炭採掘・運搬方法、その他鉱物の探査、浦河管内の牧畜・開墾の適地調査、漁業改良の方法調査など多岐にわたっています。函館・室蘭を経て6月札幌着。札幌近郊・小樽を調査。8月札幌発、勇払・浦河を経て、函館へ、そして8月末帰京しています。そして、1875年(明治8年)3月、ケブロンの開拓事業に関する具体的な意見や多彩な見解を総括した「開拓使顧問ホーレス・ケブロン報文」を提出しています。

これらの長期にわたる北海道巡検、そして高く評価されている「ケブロン報文」等は、実は、通訳としての湯地定基の協力なくしては、決して結実しなかったものと思われます。湯地の果たした役割と功績はきわめて大きなものがあります。

ケブロンは、さらに帰国に際して、契約を延期して「報文要略」をまとめて、開拓使に提出してから、1875年(明治8年)5月23日、帰国しています。

明治天皇が、明治8（1875）年、任務を終えて帰国しようとしていた  
ホーレス・ケブロンを招き、謁見して述べられたお言葉（英文）

（和文）

ADDRESS OF THE EMPEROR TO  
COMMISSIONER CAPRON.

ADDRESS OF HIS IMPERIAL MAJESTY THE TENNO OF  
JAPAN.

(Translation.)

Since your engagement with the Kaitakushi, intrusted as you have been with the work for the settlement and development of the Island of Hokkaido (Yesso) you have so assiduously and faithfully executed your responsible duties, and advised the Chokuwan, that the important work of the department has been successfully carried out and it is daily progressing to our satisfaction. Indeed your services were valuable and deserve my high appreciation, and it is hardly a matter of doubt, that the future progress of that Island, the fruit of your labor, will much advance the happiness of my whole Empire.

Now, on your return to your country, on the termination of your engagement, I have to acknowledge your valuable services, and wish to express my good wishes for your future prosperity and happiness.

勅語  
朕曩ニ汝ヲ開拓使ニ聘シ北海道開拓ニ從事セシム汝能ク長  
官ヲ輔佐シ匪勉職ヲ盡スヲ以テ事業皆其要ヲ得テ日月ニ進  
歩セリ朕深ク之ヲ嘉賞ス將來全道ノ繁殖ヲ致シ我カ國家ノ  
洪益ヲランヲ復タ疑ハ容ザルナリ今期滿ヲ歸ラントス朕汝  
カ功勞ヲ表シ併テ將來ノ幸福ヲ望ム

勅語

朕曩ニ汝ヲ開拓使ニ聘シ北海道開拓ニ從事セシム汝能ク長  
官ヲ輔佐シ黽勉職ヲ盡スヲ以テ事業皆其要ヲ得テ日月ニ進  
歩セリ朕深ク之ヲ嘉賞ス將來全道ノ繁殖ヲ致シ我カ國家ノ  
洪益タランヲ復タ疑ナ容ザルナリ今期滿ヲ歸ラントス朕汝  
カ功勞ヲ表シ併テ將來ノ幸福ヲ望ム

(和文)

#### ■黒田清隆・ホーレス・ケプロンの雄大な北海道開拓計画とその業績

草創期の初代判官島義勇・その札幌都市計画の実施にあたった第2代判官岩村通俊のあとを受けて、黒田は、ケプロンと相談して北海道開拓の事業推進のために「開拓使10年計画」(明5～明14)を立てます。当時のお金で、1,000万円の予算で、外国の新しい技術や制度を取り入れて北海道を開拓しようと考えたのです。

まず、ケプロンの「農科大学を興すべし」の献言を受けて、1872年(明治5年)4月15日、東京芝増上寺山内に「開拓使仮学校」を開校します。校長荒井郁之助・教頭アンチセル・教授ワッソンとし、お雇い教師はほとんどアメリカ人を採用しています。官費生50名・私費生50名を定員として、官費生は10年・私費生は5年開拓使奉職を義務とします。(この「仮学校」が、校風弛緩により廃校・再建、女子校併設などの曲折を経て、1875年(明治8年)8月、札幌に移転して「札幌学校」(校長調所広丈)となり、翌1876年(明治9年)7月31日クラーク、ホイーラー、ペンハローの一行を札幌に迎えて、8月14日の「札幌農学校」(校長調所広丈・教頭クラーク博士)の開校へとつながります。)

ケプロンは、1871年(明治4年)9月、早速、東京の青山・赤坂・麻布に農事試験場「官園」3ヶ所設置して、アメリカから輸入した動植物を管理しました。(この建設・事業責任者に、村橋久成が任命されています。)開拓使は、「将来北海道で栽培する農作物は、まず東京の官園で試験栽培し、成功のメドがついてから、北海道に移殖しよう」と考えていました。後に、北海道の七重官園(のち七飯勸業試験場)・札幌官園が設置されました。札幌では、札幌本庁敷地北側に3600坪(後に40万坪に拡大)の御手作場を設け、さまざまな農作物が栽培され「葡萄園」・「ホップ園」・「果樹園」なども設けられました。その後、1876年(明治9年)には、この官園のうち、30万坪が札幌農学校農場に移管されました。

開拓使は、ケプロンの献策により、札幌市内大通～北1条・東1丁目～東4丁目を工業ゾーンとして、さまざまな「官営工場」を建設しました。当初、東京の官園内に建設予定であった「麦酒醸造所」ですが、村橋の提言が認められて、村橋久成と麦酒醸造技師中川清兵衛による「開拓使麦酒醸造所」(明9、今日のサッポロビールの原点)もこの地に誕生しています。「開拓使葡萄酒醸造所」「開拓使製糸所」などの開拓使諸工場設置も、黒田が若き日に薩摩藩で経験した近代科学重視の考え方が反映したものと考えられます。

1873年(明治6年)11月、黒田は屯田兵の創設を建議します。大久保利通(1830 - 1878)の支持を受け、12月に承認されます。この屯田兵制度は、北海道の開拓と北方警備の重要性に加えて、禄を失った士族救済の役割をはたす画期的な政策でした。1874年(明治7年)6月、黒田は、陸軍中将、北海道屯田憲兵事務総理。同年8月、参議兼開拓長官となり、榎本らの旧幕臣の多くを開拓使に登用しています。1874年(明治7年)、ケプロンの進言により、屯田兵最初の入植地を札幌郡琴似村と定めて、兵屋208戸・中隊本部・練兵場・授産所などを建設しますが、この「琴似屯田兵村」建設の任にあたったのも村橋久成でした。翌年5月、屯田兵・家族965人第1陣が入植しています。以後、北海道には、最終的に37の兵村が出来、合計約4万人が入植します。＜屯田兵制度は1904年(明37)廃止まで続きます。＞

黒田は、明治政府の「開拓使10年計画」(明5～明14)の計画立案・事業推進のために、ケプロンの「農科大学を興すべし」の献言を受けて、まず、1872年(明治5年)3月、東京芝増上寺山内に「仮学校」を開校します。お雇い教師はほとんどアメリカ人を採用しています。(この「仮学校」が、1875年(明治8年)8月、札幌に移転して「札幌学校」(校長調所広丈)となり、翌1876年(明治9年)7月31日クラーク、ホイーラー、ペンハローの一行を札幌に迎えて、8月14日の「札幌農学校」(校長調所広丈・教頭クラーク博士)の開校へとつながります。)

ケプロン在任中のお雇い外国人招聘の大半は、ケプロンの推薦・承認のもとに採用されたこともあり、多くのアメリカ人技術者が中心となったようです。地質・測量・鉱山のライマンや助手マンロー(1872・明5来日～)、農業・牧畜のポーマー(1871・明4来日～)やダン(1873・明6来日～)などがよく知られています。ケプロンを筆頭に48名の「お雇い外国人」がアメリカ人でした。

札幌農学校関係では、初代教頭・農学・化学・数学のクラーク(明9,7 - 明10,4)、土木工学・数学・第2代教頭のホイーラー(明9,7 - 明12,12)、化学・農学・数学・第3代教頭のペンハロー(明9,7 - 明13,8)、農学・官園監督・第4代教頭のブルックス(明10,2 - 明21,8)、生理学・解剖学・病院医術顧問のカッター(明11,9 - 明20,1)、数学・土木のピーボディー(明11,9 - 明14,7)などを迎え、さらに、サマーズ(明13,6 - 明15,6)、ストックブリッジ(明18,5 - 明22,1)、ヘート(明21,1 - 明25,8)、ブリガム(明22,1 - 明26,11)の合計10を迎えています。また、茅沼・幌内炭鉱のゴージョー(明12,2 - 明13,3)・ドーズ(明12,2 - 明12,9)、鉄道敷設・土木顧問のクロフ

オード(明 11,12-明 14,8)、水産加工・魚肉缶詰製造のトリート(明 10,8 - 明 12,2)・スウェット(明 10,6 - 明 11,12)などが招かれています。

#### ■帰国後のホーレス・ケブロン(晩年)

ケブロンは、帰国後はワシントンに在住して静穏な余生を送ったといわれます。1876年(明治9年)には、ワシントン哲学会で「日本」と題する講演をし、また1877年(明治10年)西南戦争に際しては、黒田の要請(黒田は65,000ドルをケブロンに送金)に応じて鉄砲・弾薬の調達をしたり、開拓使からのいろいろな依頼に対応してなお日本に目を向けていたといわれます。晩年のケブロンにとって、日本とのきずなは貴重であったようです。ケブロンは時折、自宅に議員や各省の高官を招いて、日本から持ち帰った美術工芸品を披露するのを楽しみにしていたそうです。ケブロンの人柄は、いつも誠実で奥ゆかしい態度で人に接し、虚飾を廃した質素な生活を好んだといわれます。

1884年(明治17年)1月、日本の天皇から勲二等旭日章が授与されました。ケブロンは、勲章と日本でのケブロンの功績を書き連ねた天皇署名入りの賞状に「深い感動」をおぼえたといわれます。

そして、1年後の1885年(明治18年)2月21日、ケブロンはワシントン記念塔完成を祝う式典に出席します。その日はよく晴れていたが、風の冷たい日であったそうです。帰宅後、気分の不調を訴えたケブロンは、その翌日、80歳の生涯を閉じたのでした。

ケブロンは、開拓使顧問在任中は、黒田の信頼もきわめて厚く、職務にたいしては誠実そのものであったといわれます。しかし、ケブロンの指導による北海道開拓事業の成果にたいしては、開拓使官員や内外新聞の批判、多くの優秀な部下たちとのトラブルなどもあって、きびしい評価もあったようです。ケブロンの北海道の総合的な開発の計画・構想は開拓使に対してのみ向けられ、顧問としての職分に徹していたようです。

#### ■結び

黒田の北海道開拓計画がなければ、ケブロンの招聘も札幌農学校の開校もなく、クラーク博士も札幌にこなかったでしょう。そして内村鑑三も新渡戸稲造も世に出なかったでしょう。

1906年(明39)、大通公園に銅像が建てられましたが、1943年(昭18)、戦争の資材として潰されました。そして、1968年(昭43)、北海道開道百年を記念して大通公園10丁目に東面して、「黒田清隆」「ホーレス・ケブロン」の銅像が建てられました。以来、二人の像はいつも札幌の街を見つめています。